

佐賀県立博物館報 No.51

佐賀市内 1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947

木造阿弥陀如来立像 鎌倉時代

小城郡小城町馬場 岩蔵寺

像高 九七・八センチメートル

阿弥陀如来は西方十万億土という遙か彼方の極楽浄土に住む仏さまで、人の命が終わる時ははるばる枕辺まで来られ、極楽浄土に往生するよう救ってくださるとして信仰されている。阿弥陀信仰は平安時代の中頃から大衆の間に広まり、以後その進展によって阿弥陀如来像は多く造立されてきた。



本造はヒノキ材寄木造、玉眼、彩色像で、額には水晶の白毫をはめ、両肩に衣を被い、右手は腕を曲げて掌を外に向け、左手は垂下して来迎印（上品下生）を結んで蓮台上に足を揃えて立つ。頬の張りのある肉付き、がっしりとして均整のとれた姿態、快慶様の彫りの深い流麗な衣文処理など巧みで、相当手腕をもった仏師の作であろう。

岩蔵寺は延暦二十二年（八〇三）聖明上人によって創建され、建久三年（一一九二）には葉上上人が勅命を受けて再興したと伝えられる肥前地方では古刹の一つである。

目次

- 木造阿弥陀如来立像..... 1
- 仏像彫刻調査記録..... 2~7
- 古伊万里油壺..... 8~9
- 玄界の捕鯨聞書き..... 10~14
- 佐賀県内所在博物館等施設紹介..... 15
- 博物館日誌・行事のお知らせ..... 16

博物館が実施した調査および研究から、今回は、新しく知られた「仏像彫刻の調査記録」と、「玄界の捕鯨」聞書き、及び新資料「古伊万里油壺」について紹介します。仏像彫刻の調査記録

資料 1

木造如来坐像 平安時代後期 像高 58 ㎝

伊万里市大川町山口 通称公園下薬師堂

偏袒右肩に衣をまとい、右足を前にして結跏趺坐した坐像である。両手は、ともに肘先から欠失しているので尊像名を明らかにすることはできないが、地元では薬師如来と称している。ヒノキ材、螺髪切付、彫眼の1本造りで、もとは彩色像であったものと思われるが、今では頭部の螺髪にのみ黒彩が残っている程度で他の彩色はすべて剥落して素木像をおもわせる。

構造は頭と体部が共木で、左右の肘までが1材でつくられている。背面中央部の肩下から像底にかけて縦長に33×6.5センチの穴をあけ内削りを施している。内削りは雑で、直径約13センチの茶筒状に胸のあたりまで施している。背面の内削りを覆う背板はすでに失われている。左右の手は肘先から別材翹付けで、左手肘先には柎穴が残っている。膝前は1材で彫整して、これを奥に設けた左右2本の柎で体部に結び合わせている。膝部も肉を厚く残す粗い内削りがなされている。木取りは、顔のヒビ

割れを防ぐため木芯部が像の中心になることを避け、右肩上来るように配慮している。その心配の通り右肩の芯のまわりはヒビ割れが進み、銅と鉄のカスガイでその割れを止めている。

髪際には34粒を数える小さな螺髪を彫り出している。前面の螺髪につくりに対して後頭部の螺髪は粗雑で、縦横に刻み目を入れた程度の整形で終わっている。薄くてなめらかな衣文の表現や、頭部・体部・膝部の調和もほどよくとれている。半円形の眉、伏目がちの目、ほどよい肉付きの体、やさしい撫肩などは、この時期の彫法をよくあらわしているといえよう。本像は損傷がひどいのが惜しまれるが、伊万里地方では、この時代の彫像が少ないので仏教活動を知る上で貴重である。

近年まで、地元の人々は身内に重病人ががると本像を病人の枕元へ運び、病の治癒を祈ったという。

| 法量 | 髪際下 | 50.6 ㎝ | 面長 | 10.8 ㎝ |
|----|-----|--------|----|--------|
| | 面幅 | 11.8 〃 | 面奥 | 15.4 〃 |
| | 肩幅 | 29.0 〃 | 肘張 | 35.0 〃 |
| | 胸厚 | 14.5 〃 | 腹厚 | 19.0 〃 |
| | 膝張 | 47.5 〃 | 膝奥 | 36.0 〃 |



資料 2

木造天部形立像 平安時代

小城郡小城町馬場 岩蔵寺大日堂

像高 阿形 106 ㎝ (現在高)

吽形 97.4㎝ (現在高)



阿形

大日堂には像名不明の阿・吽形の天部像が伝えられて
いる。阿形は1木造り、彫眼、兜を被り体部には鍔を着
け、腹部には獅鬚があらわされている。その姿態は右に
腰をひねり右足に体重をかけ、右肩をやや上げて立ち、
目は左斜前方を見おろす視線をとっている。右肩の状態
からして右手を高くかかかけており、あるいは持国天像と
も考えられるがさだかでない。顔の表情は目を大きく見
開き、眉間には皺を寄せ、口を半開にしているが穏健な
表情で、一般に見る四天王像の激しい忿怒の表情は目立た
ない。全体としては頭部が小さく目であるが面部・体部と
もに厚く、下半身の臀部・大腿部には特に肉を付け堂々
とした体軀にしている。背面の左下裳裾には径5.5㎝のふ
し穴があいているが、その部には埋木もせずそのまま仕
上げたようである。

像の構造は、頭・体・足部まで1木より彫出している。
内割りなし。腕は左右とも肩口で丸杓に差す。矧付けの
面が長径13㎝の略円形状に残り、その中心部に径1.5㎝、
深さ2.5㎝の杓穴が設けられている。右肩後に用材の芯を
もってきている。



今では両腕先と両足の脛先を欠くとともに、背面腰部
には補修のための刳込みと考えられる縦8.3㎝、横15.8
㎝、深さ4㎝の方形の穴がある。

いっぽう吽形であるが、頭部は髻を結び、天冠台を彫
り出している。目は彫眼でやや左正面を凝視する。一般
に忿怒相の目は上臉が目頭の近くで裂け、眼球が飛び出
た形に表現されるが、本像の目の彫りは臉・眼球ともに
浅く、大きく見開いてはいるが穏やかな形に表現されて
いる。次いで体幹部の姿態は腰を左に捻って左足に重心
をかけ、右足を軽く曲げて立つ。顔の程よい肉どりと、
動きを押えた静かな面貌の表現に対し、体部は前者と同
様肉どりは太造りである。裳裾はひるがえりもなく静か
に垂れている。

像は、その大部分が虫に食われ朽損しているが、部
分的に残る当初の姿から甲具やその他細部までが巧みに
彫られていたものと推察される。

構造は頭・体・足部まで1材でつくり内割りなし。左
右の腕を肩口で丸杓に挿す。左右の腕と両足の脛・首を
欠き、右胸部に修理によると思われる切り取り部がある。

用材の芯は左肩後にとっている。

この阿吽の2像の首の有・無、口の開きの阿・吽形、腰の振りや肩が示す手の位置など姿態が対照的であり、また像の形整や体幹部の構造からみても、まったく組みとして同一工房でつくられており、最初から二天像として須弥壇を守護していたものとも考えられる。

法量

| | | | | |
|------|----|-------|----|-------|
| (阿形) | 面長 | 9.4寸 | 胸厚 | 17.9寸 |
| | 腹厚 | 20.0寸 | 腰幅 | 30.5寸 |
| | 腰厚 | 22.7寸 | | |
| (吽形) | 面長 | 9.1寸 | 面幅 | 8.9寸 |
| | 胸厚 | 18.3寸 | 腹厚 | 20.8寸 |
| | 腰幅 | 32.3寸 | 腰厚 | 23.3寸 |



吽形



資料 3

木造阿弥陀如来坐像 鎌倉時代後期

佐賀市神野町三溝 大興寺

像高 84釐

本像はヒノキ材の寄木造、螺髪刻出、彫眼、そして彩色は剥落が激しいが一部に残る漆箔から元来漆箔像であったものと考えられる。また、上品下生の弥陀来迎印を結び、偏袒右肩に衣を着け、右足を外側にした結跏趺坐をする。彩色が剥落した像の木肌全面には最後の仕上げに用いた丸のみの痕跡が残っている。

構造は、頭部は耳の後ろで割削ぎし、襟許から三道下

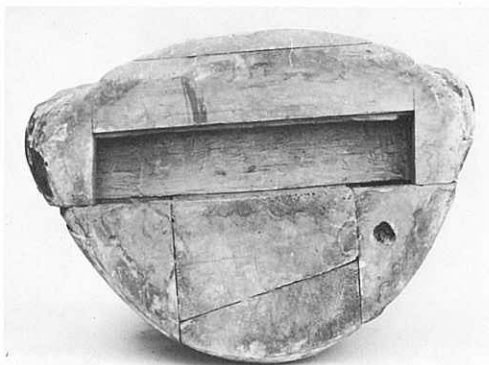
で体部を削ぐ。体部は左右の肩脛をそれぞれ別材で削ぎ、本体の肩の部分から地着きまでを削って内削りし、削ぎ付けている。右手は肘先を削ぎ、左手は挿し込みにし、その納まる袖口も別材削ぎである。膝前は別材の大きな横木を削ぎ、膝と腰部の間には左右共に三角材を削ぎ大腿部をつくっている。袈先も小材削ぎ。

やや低目の肉髻、髮際には24粒を並べたやや大きな目の螺髪、張りのある頬の内付け、衣文の彫りは比較的に深く流麗で、体部の肉よりも均整とれ充実感があつて鎌倉様をよく示している。

肉髻朱・白毫・指先などが欠失し、一部破損もあるが本体は比較的によく保存されている。

大興寺は黄檗宗の寺院である。本寺は神埼町仁比山にあった安国寺の末菴の即宗菴を天和3年9月に再興し、天保14年9月に大興寺と改称するようになったと伝えられている。この阿弥陀如来像は佐賀郡大和町野口にあった大願寺（現在廃寺）の本尊であったといわれ、また一説には佐賀市白山町にある高寺の持仏堂の本尊であったともいわれているが、その伝来は不明である。

| | | | | | |
|----|-----|------|---|----|------|
| 法量 | 髮際下 | 74.5 | 廻 | 面長 | 17.6 |
| | 面幅 | 17.8 | 〃 | 面奥 | 21.6 |
| | 肩幅 | 44 | 〃 | 肘張 | 53.5 |
| | 胸厚 | 23.6 | 〃 | 腹厚 | 28.2 |
| | 膝張 | 69.0 | 〃 | | |



資料 4

木造地藏菩薩坐像 南北朝時代

佐賀郡大和町久池井 高城寺

像高 72.0㎝

頭部は円頂、法衣を通肩に着て、右足を上にして結跏趺坐した坐像である。ヒノキ材、寄木造りで、玉眼を嵌めており、今は彩色が剥落して茶木造風であるが痕跡から見て漆箔像であったものと推察される。

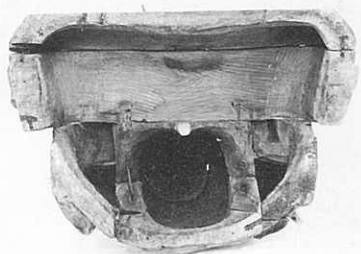
木寄せは頭部は耳の中央で前後削ぎ、襟許から頸部三道下の線で挿首とする。体部はいずれも地着きまで前面と背面の前後を縦削ぎし、それに両肩とも外側を地着きまで各1材を削ぎ付けている。膝前は大きな横材を削ぎ、正面膝前に垂下する裳先の部分の小材を削ぎ付けている。また臀部から膝にかかる彎曲部は別に三角材を削ぎ付けているが、今はこの三角材と左右の袖口から先をと

もに失っている。体内には粗い内削りがなされている。

顔はいくぶん面長で頬の肉付きは豊かにあらわされている。くっきりと曲線を描いた眉、伏目がちな目、静かに結んだ口許などの表現は写実的で、穏やかな面相をつくっているが、衣は厚ぼったく、衣文も形式化しており、南北朝期の彫刻の特色を示している。

像の表面には仕上げに使った小さな丸のみの痕跡があり、左肩削ぎ付け部には「地藏命」と墨書したのが残っている。

| | | | | |
|----|-------|-------|-----|-------|
| 法量 | 髪際下 | 64.0㎝ | 面長 | 17.1㎝ |
| | 面幅 | 15.5〃 | 面奥 | 19.2〃 |
| | 肩幅 | 38.5〃 | 胸厚 | 20.5〃 |
| | 腹厚 | 22.4〃 | 肘張 | 44.4〃 |
| | 膝張 | 60.0〃 | 膝奥 | 45.5〃 |
| | 膝高(右) | 13.1〃 | (左) | 12.6〃 |



(注)

彫眼 木を彫って目をえがいたもの。

玉眼 目を削り抜き眼球の部分に水晶をはめ、裏に絹などで瞳を描いてあてがい真実の目の感じにしたもの。

結跏趺坐 両足を組んで坐っている姿。

快慶 運慶と並ぶ鎌倉時代の代表的彫刻家。安阿弥と称した熱心な仏教信者でもある。

資料 5

銅造弁才天坐像 江戸時代

佐賀郡諸富町大寺寺井津字西寺井 安龍寺
像高 57 ㎝

本像は宝冠を被り、輪光背をつけ結跏趺坐する像である。金光明経に 8 臂像と説かれている通り 8 臂の弁才天像であって、頭頂には鳥居と人頭蛇身の宇賀神を置き、宝珠と輪宝と雲文であしらった宝冠を被っている。髻にかかる前髪は耳の中ほどを通して後部の髪とまとめ、冠紐とともに両肩に垂れかかる。面相は福神にふさわしく弧を描く眉は三日月形に眉尻を下げ、目を細め、口元をゆるめて微笑する。

体部についてみると、8 手のうち右側 4 本の手には第 1 手宝剣、第 2 手宝箭、第 3 手宝棒、第 4 手絹索。左の 4 本の手にも第 1 手から宝珠、宝弓、輪宝、宝鈴の順に持物をもたせている。これはハンダ様のもので各手に接着してある。両肩前に各 1 ヲ所、腹前には括った腹帯に沿って 3 ヲ所に瓔珞を懸け、体をにぎやかにしている。瓔珞は三角・方形・長方形の薄い鉄板に、黄と青の 2 個のガラス玉をはさんで針金で繋いだもので、これを菊花文様の座金を通して像内で止めた簪状のピンの頭に取り付けている。また、左右の腕から垂れる衣の袖は踏袖として立て、その縁を波状にうねらせて併せて袖と袖口

の衣文線を膝前に集めてにぎやかにしている。

構造は左右の第 1 手を含む頭・体幹部を惣型による 1 鋳にし、他の 6 本の手は左右 3 手ずつ 1 連にして別鋳し、背面と接するあたりに造り出した 21 個の小突起状の柄を本背部へはめ込んで止めている。本体の背部内面には止めた 21 個の小突起が認められる。

輪光背も同時期のもので火焰宝珠 3 個を輪に銚止めし、体部背面にその柄を銚止めて固定している。

宇賀神の蛇身の文様、髪のも筋、踏袖の皺、台座蓮弁の葉脈などはたがねで筋を入れて表現している。

台坐は 1 鋳で蓮弁を 14 枚、3 段に配している。

本像の鋳造技術は確か安定しており優れたできえを示している。近世の鋳銅像はその殆どが戦中供出されて遺例が現当たらず、当時の信仰は勿論造像の技術について知る機会を得なかった。本像はそれを知る資料として貴重である。

| | | | | | |
|----|-----|--------|--------|----|--------|
| 法量 | 髪際下 | 41 ㎝ | 種 | 面長 | 9.5 ㎝ |
| | 面幅 | 9.5 ㎝ | | 面奥 | 13.0 ㎝ |
| | 肩幅 | 27.0 ㎝ | | 肘張 | 29.0 ㎝ |
| | 胸厚 | 13.5 ㎝ | | 腹厚 | 14.5 ㎝ |
| | 膝張 | 39.0 ㎝ | | 膝奥 | 30.0 ㎝ |
| | 台座 | 直径 | 50.0 ㎝ | | |
| | | 高さ | 14.0 ㎝ | | |



調査に際しては次の各氏・寺院等の協力を得た。記して感謝申しあげる。九州大学美学美術史研究室、八尋和



泉氏、下平恒男氏、諸富町教育委員会、岩蔵寺、大興寺、高城寺、安龍寺。

古伊万里染錦唐子菊文油壺

江戸中期～後期 径10.6cm 高7.2cm

ここに古伊万里の油壺がある。唐子に菊や草花をあしらひ、金、赤、緑、青、黄色で絵付けしており、その形といい、大きさといい、とても可愛らしいものである。

油壺とは普通、婦人用の髪油を容れる小形の壺のことで、江戸中期以降、肥前有田あたりで非常に多く作られたものである。有田だけでなく、美濃や瀬戸、九谷や京など各所で焼かれており、形も丸型や徳利型など多種あるが、この油壺のように、たまねぎ型をしたものが圧倒的に多い。他に四角、六角形のものもある。また多くは磁器製の染付または赤絵であるが、唐津のもののように陶製の油壺もある。

古伊万里の染錦油壺は主に有田外山の応法山で焼かれたものだといわれ、それより前の初期伊万里の染付油壺は、天狗谷の窯跡からも出土しているが、詳細は分からない。有田外山で焼かれるようになった背景としては、江戸中期以降、輸出陶磁に余力が生まれ、また以前にも増して生産力が伸びたため、一般大衆の雑器類も多量に焼かれるようになったと考えられている。

髪に美しさを与え、粘着力を付けるために髪に油をつけることは、奈良朝にはじまるといわれる。「日本霊異記」には猪の油をつけた女の話が出てくる。はじめは油脂に近いものが髪油として使われたようであるが、油脂類は手に入りにくいものであったため、サネカズラの粘液を整髪に使ったとする方が一般的かもしれない。

油壺を「古事類苑」にひろってみる。油壺は器用部Ⅰ、容飾具の中にある。容飾具は鏡、櫛、笄から白粉（おしろい）、口脂（くちべい）等々が記載されているが、油壺

は髪油の項の中に油筒、油桶と共に入っている。油壺の名は「今昔物語」「明月記」「嫉入（よめいり）記」等に見られるが、形状その他詳細は定かではない。油筒の項に「古へは、綿に香油を漬し置いて用ゆるのみなり、後には是を竹筒に貯へけるにや……」（娯遊笑覧）とあり、綿に油を染み込ませ、その綿で髪を撫でつけて光沢をつける油綿（油脂、あぶらわた）が長い間使われたらしく、それを容れる容器を油わた入、油筒といったのである。

また髪付油として伽羅油が用いられた。伽羅油は唐椒、胡麻油、丁香、白檀、山梔子、甘松等の混合物で、男は松脂（まつやに）分の多いもの、女は蠟分の多いものを用いたようで、これは日本髪を形を整えるのに欠くことのできないものである。

油壺は髪油がサラサラした胡桃油、胡麻油、菜種油等の水油が一般的になってから、使用されるようになったらしい。それも普段の化粧の際に、髪をとかしながら使ったものであろう。

今でこそ趣味的な収集品となっているが、江戸期、明治、大正ごろまで、多くの婦人達に可愛がられ、大いに使用された化粧具の一つであったわけである。

なお朝鮮半島で焼かれた油壺と比較してみると、多分朝鮮のものの方が本元であろうと考えられるが、形や大きさはほとんど同じである。多くは青磁や染付、白磁などであるが、高麗時代の青磁の油壺の中には非常に質の高い、良品もある。また厨房で使用する料理用の油を容れたらしく、この点日本とは相異なる。

朝、はじめて鏡に向かった婦人が、油壺の口にひとさし指をあてて、ひっくり返して、適当量の油を指につけ、髪につけ櫛げずる、そんな姿が浮かんでくるような油壺である。



染錦唐子菊文油壺